

教職大学院 News Letter 第6号

協創

にいがた教育フォーラム
2018in March 特集2018.4.1
Since2016

3月3日(土)、新潟大学教職大学院院生の一年間の学びを報告し、新潟の教育についてともに考える「にいがた教育フォーラム2018in March」を開催いたしました。午前の部では、加治佐先生からご講演をいただきました。

講演 「学び続ける教師」

独立行政法人国立高等専門学校機構監事 加治佐 哲也 氏

学校教育の課題は、複雑化、高度化し絶えず変化しています。それに対応していく教職は、間違いなく高度専門職です。自己成長が基本であり、発想の転換をしていくような学びを続けていかなければなりません。そして、このような『学び続ける教師』を大学、教育委員会、学校が一体となり支援していくことが期待されています。特に大学には、この期待に応えるべく、改革が求められています。

では、期待に応えるための大学改革、教職大学院の在り方とは何でしょうか。

一つは、教職大学院が大学全体の教員養成・研修のセンターとなることです。学部を含む大学の養成機能全体の充実をリードしていくのです。各学部の教員や学生の高度な相談等に応じていくという役割を担うことが求められます。

次に、大学と教育委員会・学校との連携・協働のハブとなることです。大学による地域貢献の充実をリードし、地域の教育課題解決のためのコンサルテーション機能としての役割を果たし、地域における大学の存在意義を上げていく必要もあるのです。

また、新たな教育課題等に対応する内容とするため教育課程の改善も求められています。教職にはカリキュラム・マネジメント力や、エビデンスに基づいて教育実践の効果を測定・評価する力などの資質・能力を身に付けることが必須です。この力が様々な実践の効果を外へ発信し、日本の教育全体を変える力となっていきます。そして、勤務しながら学ぶ教師が学びやすい教育課程も必要です。毎日、大学に通うの

ではなく、各研修を単位化し、それらを積み重ねていくラーニングポイント制の導入がその例であり、これが主流になってくるでしょう。

以上のように、「学び続ける教師」を支援する姿勢を示す大学改革が必要なのです。これらの改革は、大学側だけでなく、教育委員会、学校などの支持を得るようにならなければなりません。そこで、教職大学院で学んだ現職教員が現場に戻り、培った力を発揮したり、研修を担ったりし、いい循環をつくっていくことが大事です。今後、大学と教育委員会、学校の一体化はどんどん進んでいくでしょう。



高橋姿学長ご挨拶 (要旨)

新潟県には教職大学院を持つ大学が、新潟大学を含め2つあり、それに対して様々な意見が存在しています。しかし、大切なことは、目の前の子どもを見ることです。新潟県は大きく、様々な地域で子どもたちは生活しています。目の前の子どもたちのために、教職大学院はどうあるべきなのか、新潟県の地域性や大きさも踏まえて考えていく必要があります。設立から2年たち、これからの教職大学院に大いに期待するところです。

にいがた教育フォーラム 2018 In March プログラム

【午前】全体会・講演

10:15 開会の挨拶

10:30 基調講演

【午後】ポスターセッション・ラウンドテーブル

13:00 ポスターセッション

14:15 ラウンドテーブル

分科会	ラウンドテーブルのテーマ
第1分科会	教育課程編成
第2分科会	授業づくり
第3分科会	生徒指導・教育相談
第4分科会	学年・学級づくり
第5分科会	学校経営
第6分科会	特別支援教育

ポスターセッション

2つの教室に分かれて、院生の学びを報告しました。熱気と活気あふれるやり取りの一部をご紹介します。

ポスター前での対話を通して得た学び

学校経営コース現職院生2年 藤塚 静治

私は「特別活動を核とした学校づくり」について発表を行った。参会者からは、「学級・学校の力を高めようとする



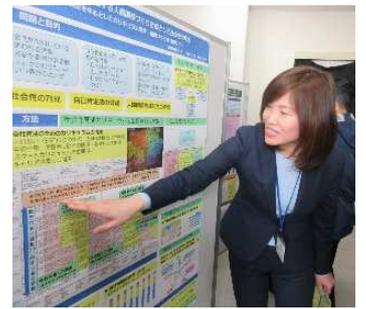
職員の話し合いを通して、職員間の雰囲気よくなっていることが想像できる」「子どもの自律性を高める働き掛けを職員の合意形成で生み出している」との評価をいただくとともに、「自律性を高める言葉掛けについて、各学級で生まれた言葉を掲示するなど取り上げることで、互いに支え合い高め合う学級集団がより育成されるのではないか」という助言もいただいた。参会者との対話の中で、私にとってさらに学びのある時間となった。今後の学校現場は、解決すべき課題が増えると予想される。職員による双方向の話し合いは、指導法の獲得だけではなく発想の転換を生み出す機会として大事になるという言葉もいただいた。

学校づくりを職員全員で協同的に進める意義と重要性について、再確認できるよい時間となった。

教職員との協働による社会性育成の成果

教育実践コース現職院生2年 平出 久美子

教職大学院で学んだ理論と、勤務校での実践とが往還した、充実の1年間の学びを発表した。「全校体制で推進する人間関係づくりを核とした社会性の育成」をテーマに、教職員との協働による実践を行った。児童の実態や、教職員の願いを反映させ、付けたい力を明確にした計画を立てたこと、児童の変容や支援を必要とする児童を把握し、担任へフィードバックすることで、必要感のある活動になるようにしたこと等、社会性育成主任の立場から働きかけ、成果を上げることができた。



参会者からは、全校で実施するための組織づくりの困難さや、校内研修を通して協働性を高める方法、学校間連携の必要性等、相互の学校事情を踏まえた意見交流ができた。校内での実践の価値や他校での汎用性を見出すことができ、今後の実践意欲が一層高まった。

教材研究が「つながり」を生む

教育実践コース学部卒2年 波多野 紗希

ポスターセッションでは、素材的研究、指導的研究、反省的研究の三つの教材研究の視点から、中学校国語科の授業づくり・授業改善に取り組んだことについて、「『つながり』を生む授業デザイン—中学校国語科における教材研究の探究—」という題目で発表した。

参会の方々からは、「つながり」を生むための手立てに関する質問や、三つの教材研究の具体とその関係性、他教科の授業づくりの視点等の話題から自分の学びを再認識し、新たな気づきを得ることもできた。また、これから教員を目指す学生の方からも、「教材研究について悩んでいたが、どのように考えていくのか参考になった。」という感想をいただくことができた。教職大学院における2年間の学び、そしてフォーラムを通して様々な方からいただいた意見を生かせるよう、今後は一人の「教員」として学び続けていきたい。



地域教育における二つの繋がり

学校経営コース現職院生1年 高見 潤

これまで「地域教育コーディネーターを中心に据えた学校と地域の連携・協働の在り方について」というテーマで研究を進めてきた。

地域教育コーディネーターを通じて、学習支援に入ってもらおうボランティアさんに、事前に活動のねらいを伝えることで、子どもたちはより深く事象に関わって学習することができたと感じるようになった。また、これらの活動の成果をおたよりで広く発信することが、子どもを取り巻く様々な立場の人たちの主体を共有する機会になることも分かってきた。自分自身、地域教育では、この「子どもたちの事象への関わり」と「それぞれの主体の共有」という二つの繋がり方が重要であると感じている。

参会の方々からご示唆いただいた、それぞれの立場の主体を共有する方法や活動の振り返りの仕方などについて、次年度以降の学校での取組として生かしていきたい。



研究発表と今後の可能性

教育実践コース学部卒院生1年 星 雄馬

ポスターセッションでは、「自分の学校でこの研究を実現するためにはどのような教材研究ができるのか」という質問をいただいた。今年度は連携協力校のみで実践を考えてきたが、これからは他の地域や他の学校での教材研究の在り方を考えていきたいと思っている。

今後の研究の方向性として、教材研究の方法の探究もありうるのではないかと考えた。また、今後の実践についても「教材研究の際に先行研究・実践を参考にすべき」「学習の成果を評価するためには振り返りを複数とり、記述の変化を見とるべき」「目標と評価の一体を目指し手立てを吟味すべき」「本単元で行った先人の苦勞と自分の生活の向上の関連付けが小学校社会科のなかで継続できれば中学校・高等学校の歴史教育においてもよい影響を与えるのではないか」等のご指導・ご示唆をいただいた。研究に限らず、今後の授業実践に活用し、有意義な研究と実践が実現できるように努力したい。



算数科の「深い学び」へのアプローチ

教育実践コース現職院生1年 竹内 直也

「深い学びを具現する算数科の授業改善アプローチ」というテーマで研究に取り組んできた。今回のポスターセッションでは、後期の課題検証実践を通して得られた知見の中で、特に、授業における学習課題と対話に焦点を当てて提案した。「深い学び」の実現に向けて、学習課題の内容や設定の仕方、対話の在り方などを見つめ直し、それぞれの意味を拡張して捉えていく必要があるという提案である。参会者の皆様からは、提案を肯定的に受けとめた多くのご意見をいただいた。また、提案を契機にした参会者の皆様との語りを通して、子どもの課題意識が変化しつつも連続的に生まれていくという「深い学び」の授業像を共有することができた。さらに、検証実践の授業構造について再検証する必要性や類似単元について実践提供する必要性など、今後の研究を進める上で大変貴重なご示唆をいただき、実り多い時間となった。



・・・ 参観者の声 ・・・

- ◆現場に近い感覚で話を聞くことができました。現場に還元できる実践・研究だったと思います。
- ◆院生の方々の研究を見聞きし、新しい視点を得ることができた。何げない活動でも、視点を変えてみることで、成果と課題が見えてくる。自校の教育に生かしていきたい。
- ◆今、自分が学校でやっている事の確認と、今後のヒントがいただけ、大変ありがたかった。

ラウンドテーブル

夢を描き、つなぐ

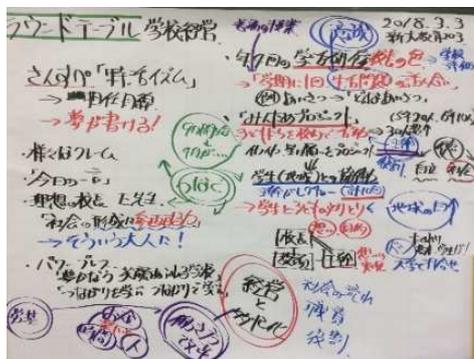
～同級生同士のテーブル～

学校経営コース2年 金田 良哉

話題提供者から、自身の「夢」や「特別活動に対する考え」、「実践」の紹介があった。子どもを「主体的に社会の形成に参画する力」のある大人に育てたいという想いが伝わってきた。「年4回の学級活動研修」「子どもが創るプロジェクト」「大学生との協働」などを自身の学校経営の一翼として実践していた。これらの実践のために、教頭には日々

の教育活動の安定化、主幹教諭には想いの実現を指示し、教育活動に取り組んでいた。

学校経営の視点で、取組の実現のための手立てとしての校長・教頭・主幹教諭の役割「つなぐこと」や、地域との関わりについて話し合うことができた。



た。参加者がフォーラムのピーターだったこともあり、率直な意見交換ができ、時には笑いもあり、充実した時間となった。

児童同士の関係づくりを考える

教育実践コース現職院生1年 桑野 まゆら

私のグループでは、学年・学級経営の中でも「人間関係づくり」に焦点をあて、話し合いが行われた。始めは、児童同士の人間関係はどうやって育んでいけばよいかということから話がスタートした。これまでのお互いの経験や実践などを取り上げながら、効果があったことや実践していて難しいと感じたことなどを出し合った。その時の児童の様子などから「児童同士の関係づくり」を行っていくためには、「教師と児童の関係づくり」が重要であろうという話へ進んだ。教師が、児童一人一人を大切に思う姿勢や教師自身が自己開示を行う姿、また児童のできないことではなく、できることに目を向けていくことなどを大切にすることが、児童同士の関係づくりへとつながっていくのだとお互いに共有することができた。様々な実践も聞くことができ、とても有意義な時間となった。

対話活動のよさを実感した ラウンドテーブル

教育実践コース現職院生1年 皆川 俊勝

話題提供をきっかけに、授業の中にどのように対話活動を取り入れればよいか、またどのような視点を持って考察させることが子どもたちのよりよい学びにつながるかをテーマに話が進んだ。年齢や校種、立場も様々で、それぞれ表現の仕方も違っていましたが、対話活動で大切にしようとしていることや子ども



たちによりよい学びをしてほしいという願いは共通していた。全員が初めて顔を合わせたメンバーであったが、時間が進むにつれて、お互いの悩みを聴き合ったり本音で語り合ったりすることができた。ラウンドテーブルが終わった後の「こんなふうに子どもたちも語り合うことができたらいいですよね」という参加者の言葉が印象的であった。新学習指導要領の実施に向け、児童・生徒の資質・能力を育成するための授業の在り方について、具体的なイメージを持つことができた。

つながることの大切さ

教育実践コース現職院生2年 鈴木 綾子

特別支援教育部会の私たちのグループには、特別支援教育を学ぶ学生、通常学級担任、小学校の専科担任、特別支援学校担任と、年齢も経験も立場も違う4人が集まった。「初期発見・早期対応」をテーマに、それぞれの立場から気になる子にどのように対応していくかということなど日ごろ考えていることを出し合った。4人に共通していた思いは、「この子のために、私(たち)にできることは何か。」ということであった。気になる子に早期に、適切に対応するために、「その子にかかわる職員同士がちょっとした時間に状況を伝え合うこと」、「担任とその子だけでなく学級の子どもたちの中で成長できること」、「その子と保護者がどんな願いをもっているかを聞き、一緒に考えていくこと」など、参会者それぞれの経験や実践から語り合うことができた。子どもたちのよりよい成長のためには、子どもたちと、職員と、家庭とつながることが大切さである。教室へ向かうエネルギーを得ることができ、有意義な時間となった。



参観者の声

- ◆中学校や他教科の話聞くことができ、とても参考になりました。先生方が悩んでいた(考えていた)ことが私も同じで、どのようにされているのかが分かり、これから生かしたいと思いました。
- ◆関心をもったことについての知見が広がった。いろいろな立場の人が混ざること、普段ではできない話し合いとなった。
- ◆大変楽しく話げできました。指導とか、そういう話でなく、様々な立場から面白いお話を聞くことができ本当に楽しかったです。

特集「授業」

本学教職大学院の授業について紹介します。

共通必修科目

第1領域「特色ある教育課程の事例研究」

(場所 鳥屋野中)

担当：宮菌衛，小久保美子，高木幸子，兵藤清一

本科目では、地域の特色や学校の教育課題に即した視点から教育的効果のある地域資源を掘り起こし、魅力ある教育課程編成案を構想・開発する力量形成をねらいとしています。この目標達成のために、今年度は以下の内容・活動を組織しました。①新潟市教育委員会地域教育推進課指導主事の講義，新潟市地域教育コーディネーターによる地域と学校の連携の事例紹介。②各グループのカリキュラム開発テーマに即して地域教育コーディネーターと共に歩く地域資源発掘のフィールドワーク。③「鳥屋野潟をフィールドとした総合的な学習の時間案」，「(小中連携を含む)防災教育カリキュラム案」の開発と相互評価。これら一連の教育課程編成の諸活動が，受講生のこれからの教育実践を導く経験として生きて働く力になることを願っています。

(宮菌 衛)

・・・院生の声・・・

「地域に開かれた教育課程」「特色ある教育課程」等，よく耳にします。しかしこれまで私は，その意味を深く考えていませんでした。この授業では地域教育コーディネーターから地域連携の事例を紹介して戴き，又一緒に鳥屋野地区を探検しました。その中で地域の方の「思い」に触れ，「地域のニーズ」や「鳥屋野らしさ」を考え，私たちの教育課程案の開発に生かしました。新年度に向けて，教育課程編成の展望を開く授業となりました。

(学校経営コース 玉井博史)

第2領域「授業研究の理論と実践」

(場所 上所小)

担当：小久保美子，高木幸子，一柳智紀，井口浩，兵藤清一

本授業は，特定連携協力校の上所小学校で実施しました。特長として2点挙げられます。

1つ目は，研究開発の対象に教科化で注目されている「道徳」を取り上げ，研究授業を先生方の研修の一環として，新潟県全域に呼びかけて公開したことです。授業は，新しい項目内容である第4学年「寛容・相互理解」で開発を行いました。「考え，議論する道徳」をテーマに，議論する過程それ自身が「相互理解・寛容」の場となるようにするには，どのような問いが良いのか，皆で追究しました。研究会当日は，外部から26名の参加者があり，熱心に協議する姿が見られました。

2つ目の特長は，上所小学校の先生で，科目等履修生として学ばれ，単位を取得された先生がいらっしやったことです。研授授業もしてくださいました。引き続き，専修免許状に必要な残り14単位を取得していただきたいと願っています。また，他にも科目等履修生として学ばれる先生方が出てきてくださるよう，長期休業中の授業のやりくり等を工夫し支援して参る所存です。(小久保美子)

・・・科目等の履修生の声・・・

授業研究では，子どもたちに道徳的な問題を自分事として捉えさせるためにはどうすればよいのか，意見を交流しながら授業を練り上げ，実践してきました。

授業後には，授業の内容を文字におこし，児童の変容を分析することでどのような働き掛けが有効か，よりよい働き掛けは何なのかなど学ぶことができました。

講義を通して，これからの道徳ではどんな授業をつくる必要があるのか，学びを深めることができました。

(新潟市立上所小学校教諭 江口 健)



選択科目
「教育相談事例研究Ⅱ」

(場所 大学)

担当：横山知行，佐藤友哉，神村栄一，吉澤克彦

講義では、教育相談場面で出会うさまざまな事例に対処するための支援方法として、主に認知行動療法に焦点を当て、その考え方や実際の進め方について紹介しました。スクールカウンセラーとして私がこれまで出会った事例に基づいたリアルな架空事例（不登校、いじめなど）を取り上げ、受講生それぞれが支援者の立場であったらどうするかディスカッションした後、担当者なりの考え方と進め方について説明しました。現場で支援を進める上では、具体的な支援の「引き出し」をいかに多く持っているかが肝要であると思っています。履修院生の皆さんは、これまでの学校場面での豊富な経験に基づいて多くの支援のアイデアを提案してくださいました。それらが認知行動療法の観点から「なぜ有効なのか」まで、考えてくださいました。この講義で扱ったパラダイムが、受講生の皆さんの支援方法の引き出しを増やすきっかけとなれば嬉しく思います。(佐藤友哉)

※佐藤友哉先生は平成30年4月より比治山大学に転出されました。

・・・院生の声・・・

現職院生や教授の先生方から事例が紹介され、その場にいる全員で一つの事例について考え、議論することができました。管理職、スクールカウンセラー、精神科医といった立場を経験されてきた教授の先生方と共に事例を検討する中で、それぞれの立場からの専門的・実践的な知見を得ることができました。様々な立場の人に連携・協力を要請することや、多角的な視点で事例や子どもを見ていくことの重要性を実感しました。

(教育実践コース
三條奏子)


【編集後記】

初めてM2とM1が全員揃ってポスター発表を行いました。たくさんの方においでいただき、多様な立場の方意見交換を行い、それぞれ有益な時間となりました。授業も2年目を向かえ、ますます充実してきています。これらの成果を学校現場と共有し、それぞれに生かしていけるようさらに教職大学院チームで取り組んでいきます。(古田島恵津子)

「学校評価の開発実践」

(場所 大学)

担当：杉澤武俊，金子淳嗣

この授業は、適切な学校評価の在り方への理解と、実践的な調査手法の習得を目的としています。そのため、学校評価における方法論的諸問題や質問紙調査の設計及び質問票の作成、統計的データ解析法などを学び、その後、評価事例検討を行います。

評価事例検討とは、各受講生が評価に関する自身の事例を報告し、全体で検討するというものです。今回は、校内研修の推進や同僚性の発揮、保護者や関係機関との連携などに関する興味深い評価事例が集まりました。

このような身近で具体的な事例は、議論を活発にします。検討を通して、受講生一人一人が、理論的な背景と結び付けたり、自身の取組を振り返ったりしながら、適切な学校評価について学びを深めています。

(金子淳嗣)

・・・院生の声・・・

「学校評価と開発実践」の授業で学んだことは、「調査をする目的を明確にすること」「評価の根拠はその目的に合わせて設定すること」である。調査とその結果には、「客観性」「妥当性」「信頼性」などの重要な観点がある。しかし、そもそも何のためにその調査や評価をするのかを忘れてはいけない。極端なことを言えば、調査や評価は目的が達成されるための手段でしかない。

よりよい学校づくりをするために生かしていきたい。

(学校経営コース
村上大樹)


お知らせ

「にいがた教育フォーラム 2018 in July」
開催日時：平成30年7月28日(土)午後
ラウンドテーブル等予定 **お待ちしております!**

新潟大学教職大学院 News Letter 「協創」 第6号 2018.4.1 発行

編集・発行・印刷

 新潟大学大学院教育学研究科教育実践開発専攻(教職大学院)広報部会
〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050

問い合わせ先: kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp

ニュースレター、各種案内等はHPに随時掲載しています。

ホームページQR→→

